

閉 会 の 辞

名古屋大学農学国際教育協力研究センター長
竹谷 裕之

昨日から今日にかけての2日間、本当に長時間にわたり、しかも非常に熱心に議論が行われたことを、センターを代表して感謝し、お礼を申し上げます。

この2日間を通じて、ずいぶん多くのことを考えさせられました。また、たくさんのアイデアもいただいたと思っております。

昨日、最初に石先生が「21世紀における国際協力の止め方」という形で、非常にラディカルな問題提起をされました。それを裏返してみますと、今までの国際協力をそのまま延長するのでは21世紀は駄目だよ、というご指摘だと受けとめて、その中身が今日も含めて、ずいぶん明らかになってきたのではないかと思います。

例えば、その方法として、昨日、UNCRDの木村所長さんが提起された宿題方式は、今回のこのフォーラムの中で皆さん方に、ある意味では大学の先生に、JICAに、それぞれ所属されるところでいろいろな宿題が出されたのではないかと思っております。この宿題方式でセルフ・エスティーム、あるいはそこからエンパワーメント、さらにモビリティと、アプローチの一つの現代版といえますか、具体像として提起された、と思っております。

こういったものをさらに深める課題と、あるいはもう1つ、市川先生から出された国民の多層的参加によるODAを含めた国際協力をどうつくり上げていくのか。今日の議論でもずいぶんいろいろな角度から意見が出たと思っております。この中には、例えば、現在のJICAとNGOとの連携をどうしていくのかといった問題もかなり、NGOの実態を含めて、これをどう伸ばしながら連携を強化していくのかという課題として出てまいりました。

さらに考えてみますと、日本における国際協力人材の育て方です。全体としては昨日、今日の報告の中では、途上国の人づくりという角度からの問題提起が多かったように思います。もう一方で、それを支える日本での国際協力人材をどうつくり出していくのか。特に、実践的な農学領域でいいますと、やはり専門的な能力は非常に大事な部分になってまいります。関心を持ったところから、さらにその専門性を裏打ちされた形で、現場に伝えられる力をつける。日本には今、国立大学では7つの国際開発研究科があります。私学を含めると、ずいぶん多く出来てまいりました。農学分野で見た場合に、それがどの程度の実力を現在蓄えつつあるのか。

最後に、JICAの枝川さんから提起された国際的な、ある意味では国際協力をめぐっての、競争の中で、日本がどう存在感を出していくのか、という問題に、我々は21世紀にどのように対処すべきか。そのことが今日、問いかけられたのではないかと、思います。

今回、いろいろな角度で検討されたものを、後でまとめた形でセンターの方で出させていただきますが、それが出てから考えるというよりも、昨日と今日いただいた議論を、熱いうちに皆さん方に考えていただいて、明日から具体的な仕事、あるいは協力活動の中で活かしていただければありがたい、と思っております。2日間、熱心なご議論でご協力いただきまして、どうもありがとうございました。これももちまして、私の閉会の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。